

〔巻頭言〕

## 立教開宗の意義について思うこと

満井秀城

今号のテーマは、2023年3月から5月にかけて厳修される「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要」である。この内、特に「立教開宗」の意義について、少し考えてみたい。

「親鸞聖人には立教開宗の意図はなかった」と考える人もいるであろう。確かに、主観的（親鸞聖人の思い）には、そうであるだろう。『高僧和讃』には、

智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ（註釈版聖典 p595）

と讃詠され、「浄土真宗ひらきつつ」の立教開宗は、源空聖人であるとされている。『歎異抄』でも、

よきひとの仰せをかぶりて、信するほかに別の子細なきなり。（註釈版聖典 p833）

との記述もあり、「恩師法然聖人の仰せ以外には他に何も無い」と述べられている。

このように、法然聖人の仰せ以外にないのであれば、『選択集』一冊があれば、他には何も要らないはずである。しかし、現実には、『顕浄土真実教行証文類』という驚くべき大著を著されたのであって、ご執筆へと突き動かさ

れた何かがあったはずである。

『顕浄土真実教行証文類』ご執筆の意図について、「総序」では、

真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くとところを慶び、獲るところを嘆ずるなり。(註釈版聖典 p132)

と述べられ、「知恩報徳による仏徳讃嘆」であると表明されている。宗祖親鸞聖人は、実に多くの著作をご執筆になられたが、そのすべての著作において共通するのが、先の「知恩報徳による仏徳讃嘆」である。我々の学問研究もまた、「知恩報徳」である。当研究所も、この思い一つで日々業務に精励している。

しかし、何故に『教行信証』という大著を著されたのであろうか。和語の聖教に示される、

みなかのひとびとの、文字のこころをしらず、あさましき愚痴きはまりなきゆゑに、やすくこころえさせんとて、(註釈版聖典 p694)

とは、むしろ逆行しているようにさえ見える。

先ず、内発的には、阿弥陀仏の救済体系の全容を、細大漏らさず提示される意図があったものと推察される。関東での伝道教化を進めて行く上でも、宗祖ご自身において、阿弥陀仏の救済体系を再確認する意味があったであろう。

次に外発的要因として、以下の二点を想定する。一つは、明恵上人による菩提心についての批判である。法然聖人滅後に『選択集』が開版され、おそらく明恵上人は、これによって初めて『選択集』を目にすることとなった。『選択集』に示される、「菩提心を非本願の行」とする論理に対して、「菩提心を否定するのは仏教ではない」として『摧邪輪』を著したのである。しかし、この明恵上人の論詰に対して、法然聖人は既にご往生であるから、聖人自ら反論することはできない。そこで必然的に、この明恵上人の論難は、後の法然聖人門下の課題として、多くの

しかかつて来たのである。聖光房弁長も、善慧房証空も、独自の菩提心論を展開しており、宗祖の「菩提心釈」も、この流れで理解すべきと思う。

外発的要因の二番目として思うのは、浄土異流の問題である。法然聖人は、「専修念仏」、「念仏一行」を確立された。それまでの「自力の諸行」に対して、このご功績は平板な言葉では語り尽くせないほど大きい。しかし、「同じ念仏を称えているのに、なぜさとりへと至るものと迷い続ける者」とに分かれるのか」という新たな課題が生じた。この課題に対して、『論註』の、「如実・不如実」の視点を援用され、「如実修行相應」としての「他力念仏」を明らかにされた。これも、『教行信証』ご執筆の大きな動機となつたであらう。